

## &lt;海外学界報告&gt;

## 日・台美術教育研究会議について

上野浩道\*

1997年12月27日から3日間、台湾の台北市で日本と台湾の教師と研究者による視覚芸術教育（美術教育）研究に関する国際セミナーが開かれた。会議そのものは大きなものではなかったが、会議のもつ性格および内容は今までの国際会議にみられないものであり、充実したものであった。そこで、このセミナー開催の経緯や発表・討議の内容に関し、読者の方々の参考になるのではないかと考え、紹介したいと思う。なお、当学会では稲垣忠彦会員も参加している。

最初に、日程について述べておこう。第一日目の午前には、台北市立美術館大会議室で参加者全員（日本側17名、台湾側30数名）の顔合わせと会議の趣旨が確認された後、同美術館展覧室で廖繼春の一連の展示作品を前にして郭博州（台北師範学院）による6年生の子どもたちに対する鑑賞授業が行われた。午後は、双方の教師による実践発表とそれをめぐっての全体討議があり、別室では日本の子どもたちの作品展示を行い、いつでもそれを自由に見ることができるようにした。二日目は、故宮博物院で展示作品を通して学芸員による日本と中国との歴史的、美術的比較検討、午後は台北市郊外の三峡に建設中の祖師廟を見学し、日本と台湾における美術の影響関係を学んだ。三日目は、台北市郊外の林口にある麗園小学校での美術の授業参観と交流であった。

次に、この会議のもつ特徴とその意義について3点にしぼって述べておこう。まず第一に、日本と台湾の両国の幼稚園、保育園、小学校、中学校、高等学校、大学の教師たちが長年にわたって続けてきた民間の美術教育研究会の研究結果が相互に発表され、研究交流とともに美術教育の研究課題が明確にされたことがあげられる。特に、民間の教育実践者レベルで教師が自らの実践を報告し研究交流を行った意義は大きいと思われる。すなわち、今までの教育関係の国際会議はほとんど政府主導によるものか教育実践から切り離された専門学会の関係者によるものが多かったのに対し、このように民間の研究会が相互に交流し、今回はそれ

に理解を示した行政院文化建設委員会や台北市立美術館といった行政側の支持・援助をえたことは、これからの教育・研究の国際交流をすすめていくうえで一つのケースになるのではないかと考えられる。

ここで、双方の研究会の経緯について簡単に説明しておこう。日本側の美術教育研究会は24年前から東京大学とお茶の水女子大学で毎月1回（現在は隔月1回）美術教育の授業実践の検討を中心に美術教育の研究を続けてきた。この研究会は、発表者は原則としてクラス全員の作品を持ってくること、それを時間をかけて全員で検討すること、そこから授業や教育の原則的なことを引き出し教育の目的を皆で考えること、実践の発表が幼稚園、保育園から高校、大学にまでわたっているのでふだん接することのできない発達段階の子ども作品や授業の有様にふれることができること、などが特徴としてあげられる。参加者も、教師のほかには児童美術研究者、教育学者、心理学者、画家、編集者、学生など多岐にわたっている。そして、この研究会に熱心に参加していた台湾からの女子留学生・林曼麗さん（東京大学で日本の美術教育方法史に関するテーマで博士号を取得、その後、台北師範学院教授、現在、台北市立美術館長）が、帰国後、同じような研究会を台湾で開き、美術教育の改革を続けてきた。そこで、双方の研究会が実践と研究の交流を行うことが望まれていた。一昨年、林さんが東京芸術大学の客員研究員として半年間滞在した時に、台湾の小学校で「土」をテーマに実験的にカリキュラム開発をしてきた実践と研究が報告された。今回、それに刺激をうけて双方の教師たちが実践を発表しあうという形で実現したのがこれまでの経過である。

この会議のもつ第二の特徴として、教育現場の実践者たちが自分の実践を子どもの作品やスライドを通して発表し、それを検討するという点であった。今までの国際会議では、実践者が互いに自分の実践を報告しあい、それを検討し、共有しあうということはなかなか見られないことで、この点でも、今回、一つの道を開いたのではないかと考えられる。発表者と発表のタイトルは以下のとおりである。日本側は、石井克（桐

\*うえのひろみち お茶の水女子大学

生市立養護学校、現桐生市立梅田中学校)「創ることの喜びを生きる力に」、宮原千香子(江戸川区立江戸川小学校)「稲、さつまいもを描く(2年)一言をそえて」、西岡陽子(枚方市立山田小学校)「目と手と心でつかみ、表現する—〈10月のヒマワリ〉〈サトイモ〉を描く(6年生)」、瓦田勝(福岡女学院中等学校)「土を描く—1997. 4~9(中学2年)—」、吉瀬博子(葉山市立葉山小学校)「物語の絵—〈かさこじぞう〉(6年)」で、台湾側は、呉進風(北新国小学校)(劉得助、林義祥、郭博州、楊忠賢、莊素美)「図画教育における郷土の教育の活用と研究—高学年図工課程における台湾建築に関する企画—」、郭武雄(自強国小学校)「感動と活気—知覚を起点とした図工教育—」、林義祥(濂洞国小学校)「辺境地区小学校の切り絵、水墨画学習報告」、葉勝哲(江翠国小学校)「もう一つの桃源郷—私の図工教育記、総合材料の開発と活用」、劉得助(台北師範学院)「造形遊びにおける初の試みと実践」であった。日本の発表が子どもの閉塞状況にあって自然との関わりで表現させ心の解放と生きる力をつけていくのが基調であったのに対し、台湾側は戒厳令解放後の民主化にあって感性の解放と民族的アイデンティティの確立をめざしての系統的体系的作業の報告が主流であった。発表者以外の日本側の参加者も、保育園の保母から大学の教師、養護学校の教師、幼児英語教育の研究者、美術教育に関心のある演出家や市民が参加するというバラエティに富んだもので、台湾側も実践者や研究者、美術館関係者らが全国から参加しており、多様な意見の交流により多面的な検討が行われた。会議は見事な同時通訳が行われたので、非常にスムーズに

進められた。

第三の特徴は、日本と台湾の美術教育の交流の歴史が意識的に取り上げられ、今後の両国の美術教育のありかたを考えさせるものであった。例えば、鑑賞授業で取り上げられた作品は、台湾の代表的な近代の画家である廖繼春のものであった。彼は戦前に東京美術学校に留学し、梅原龍三郎に影響を受けるとともに、台湾伝統の民間的色彩を取り入れ、独自の色彩と造形の道を拓いた人物である。授業でもその分析が子どもたちとの対話ですすめられ、色彩と造形の影響関係とアイデンティティについて話し合われた。また、三峡の祖師廟は、台北師範学校を卒業後、東京美術学校に留学し1934年に卒業した李梅樹が自ら30数年間かけて再建に取り組んだもので、台湾の画家が日本留学でえた芸術的目覚めによって台湾文化の復興に携わったケースを両国の教師が学ぶことを目的にしていた。最近の台湾の美術教育には、日本とアメリカの考えが入っており、実践レベルでは造形主義的傾向とそれを批判する人間主義的なものがある。そこから台湾独自の美術教育のカリキュラムを打ち立てようとする理論志向の姿勢がうかがわれた。一方、日本側も、表現教科として独自性をもつ美術教育の意味を再認識し、生きることや優しい心を育てることをめざしてのテーマや教材の工夫、表現方法として墨や毛筆の積極的取り入れなど、日本の美術教育の可能性を探っていた。このように、両国とも文化や教育における影響関係を認め、それを授業のなかで生かそうという姿勢には注目されるものがある。